

## 「土蜘蛛草紙絵巻」の制作年代と描き手の再検討

—聖衆来迎寺所蔵「六道絵」との近似性に着目して—

五月女 晴恵（北九州市立大学）

東京国立博物館所蔵「土蜘蛛草紙絵巻」は、平安時代の武将・源頼光が渡辺綱とともに人を食らう妖怪である山蜘蛛を退治する説話を描いた絵巻として知られる。これまで本絵巻の制作時期は、おおむね南北朝時代あるいは十四世紀とされており、描き手については、十四世紀の宮廷絵師・高階隆兼の画風との距離を意識したためか、ほとんどの先行研究において「正系のやまと絵師」というような曖昧な表現を用いて、その位置づけが説明されてきた。

このたび発表者は本絵巻を詳細に観察した結果、本絵巻の描き手は少なくとも三人以上であることを確認すると同時に、本絵巻全体に、聖衆来迎寺所蔵「六道絵」と共通性の高い描写を見出すに至った。以下、顕著な事例を列記する。

第二紙（以下、修復後の紙数で記す）や第二十紙の源頼光の横顔と「餓鬼道幅」の渡河の人物。第二紙の頼光が乗る馬と「人道苦相Ⅱ幅」下方の門前の馬。第二紙の渡辺綱が乗る馬の頭部と「人道苦相Ⅱ幅」中程向かって右端の馬。第二紙の先頭の人物の脚・足指と「餓鬼道幅」の渡河の人物。第三紙の平唐門と「人道苦相Ⅰ幅」の平唐門。第十五～十六紙の紅葉した樹木と「人道苦相Ⅱ幅」の紅葉した樹木。第十六紙の緑鬼の右掌・小指と「阿鼻地獄幅」下方左側の獄卒の右手。第十六紙の緑鬼の耳と「等活地獄幅」上方左側の緑の獄卒。尚、第十七紙の交差する二本の松と「人道無常相幅」下方右端の二本の松との近似性については、本多康子氏によって指摘されている。

先行研究においては、本多氏による松樹の指摘以外、本絵巻の描写を掛幅形式の聖衆来迎寺本と比較することはなかった。しかし、上記の事例の中でも特に人物や馬の描写に認められるような著しい共通性が、十三世紀後半の制作であることが有力視される聖衆来迎寺本との間に見出せることは重要であろう。この観察結果は、本絵巻の描き手が聖衆来迎寺本と同じ系統にあることを強く示唆し、制作時期についても再検討を促すものと成り得よう。本発表では、画風の検討にとどまることなく、説話内容や詞書書風などにも再検討を加え、その制作時期が鎌倉時代後半まで遡る可能性を補強したい。

発表者の考察に従えば、延慶二年（1309）頃に「春日権現験記絵巻」を制作している高階隆兼の活躍時期にやや先立つ頃には、隆兼が主宰する工房と比肩する程の力量を具えた系統の異なる宮廷絵師系工房が存在し、優れた作品を生み出していたことになろう。従来、鎌倉時代後半のやまと絵については、隆兼工房を規範とした年代観が展開されてきた感があるが、本発表では、複数の宮廷絵師系工房の存在が示されており、当時のやまと絵をめぐる制作環境に新しい視野をもたらすものとなるであろう。例えば、近年の「蒙古襲来絵詞」をめぐる「幕府や朝廷周辺において企画され」「京都の絵師」によって描かれたとする太田彩氏の議論は、本発表によって示唆される視野に収まるものと言えるだろう。